

ウェストミンスター信仰告白 第一章 聖書について

第六節 聖書は救いのために十分な啓示である

はじめに

今回は第一章第五節を通して「聖霊の内なる証し」について学びました。聖書が神の言葉であるという確信は、教会の伝統や学問的証明だけから生まれるものではなく、聖霊がみ言葉を通して私たちの心に働いてくださることによって与えられることを確認しました。すると、次にこのような問いが生まれます。「もし聖書が神の言葉であるなら、その中には何が与えられているのでしょうか」あるいは、「救いに必要なことは、本当に聖書だけで十分なのでしょうか」。今日学ぶ第六節は、この問いに答えています。

一 第六節は何を告白しているのか

第六節の冒頭には、このように記されています。

「神御自身の栄光と人間の救いと信仰と生活とに必要なすべての事柄に関する神の御意向の全体は、聖書にはっきり記されているか、あるいは、正しい、必然的な帰結として聖書から導き出すことができるかである。」

この一文には、改革派神学の聖書理解が凝縮されています。まず注目したいのは、「**聖書には、神のすべての知識が記されている**」とは書かれていないことです。信仰告白が語っているのは、**神の栄光、人間の救い、信仰と生活に必要なこと**です。つまり、第六節が語る「**十分性**」とは、**救いのための十分性**なのです。この点は、とても重要です。

二 「聖書のみ」とは何を意味するのか

宗教改革を代表する標語に「**聖書のみ**」という言葉があります。しかし、この言葉ほど誤解されやすいものもありません。ある人は、「聖書だけ読めば、教会も牧師も必要ない。」と考えます。また別の人は、「信条や神学は人間が作ったものだから不要だ」と言います。しかし、それは宗教改革者たちの考えではありませんでした。カルヴァンも、ウェストミンスター神学者たちも、歴代教会の信条を深く尊重していました。実際、ウェストミンスター信仰告白そのものが、その証拠です。もし「聖書だけあれば信仰告白は不要だ」と考えていたなら、この信仰告白自体を書く必要はなかったでしょう。宗教改革者たちが言いたかったのは、**教会も信条も神学も、すべて聖書の権威の下に置かれる**ということです。教会は聖書を解釈します。信条は聖書の教えを要約します。神学は聖書を体系的に理解しようと努めます。しかし、それらは聖書に代わるものではありません。すべては聖書に仕える働きなのです。

三 「正しい、必然的な帰結として聖書から導き出すことができる」とは

第六節には、もう一つ重要な表現があります。それは、「**正しい、必然的な帰結として聖書から導き出すことができる**」という言葉です。これは、ウェストミンスター信仰告白の神学的方法を理解するうえで欠かせない表現です。信仰告白は、「聖書に書いてある言葉だけを、そのまま繰り返し返せばよい」とは言っていません。むしろ、聖書全体を丁寧に読み、その教えを総合して結論を導くことを認めています。例えば、「三位一体」という言葉そのものは聖書には現れません。しかし、父・子・聖霊について語る多くの箇所を総合すると、教会は三

位一体という信仰を告白してきました。同じように、「キリストは一人のお方に神性と人性を備えておられる」という表現も、聖書の教え全体から導き出された教理です。つまり、教理とは、人間が勝手に考え出した思想ではなく、**聖書全体から必然的に導かれる理解**なのです。この意味で、改革派神学は「聖書を読む神学」であると同時に、「聖書全体を読む神学」であると言えます。

四 聖霊の照らしが必要です

第六節は続いて、このように告白しています。「御言葉に啓示されている事柄を、救いに至るように理解するためには、御霊の内的照明が必要である」。ここで「内的照明」と訳されている言葉は、神学ではしばしば「照明 (illumination)」と呼ばれます。前回学んだ第五節では、「聖霊の内なる証し」が語られていました。第五節は、「この聖書は神の言葉である」と受け入れる確信について語っています。それに対して、第六節では、その聖書を**正しく理解するためにも聖霊の働きが必要である**ことを教えています。ここでも注意しなければならないのは、聖霊は新しい啓示を与えるのではないということです。宗教改革者たちは、「啓示」と「照明」を明確に区別しました。**啓示**とは、神が新しく語られることです。しかし、使徒たちの時代が終わった今、教会は新しい啓示を待つではありません。一方、**照明**とは、すでに与えられている聖書を理解できるように、聖霊が私たちの心を照らしてくださる働きです。同じ聖書を読んでも、その意味を深く理解できることがあります。それは、新しい言葉が加えられたからではなく、聖霊が私たちの理解を導いてくださるからです。ですから、改革派教会は聖書研究を重んじると同時に、祈りを重んじます。どれほど優れた注解書を読んでも、どれほど原語を学んでも、聖霊の導きなしには、聖書の中心にある神の救いの御業を正しく理解することはできません。

五 教会には自由が認められている

第六節の後半には、興味深い文章があります。そこには、

「神礼拝と教会の統治に関しては、人間活動や集団に共通するさまざまな本質的でない事柄があり、それらについては、常に守られるべき御言葉の一般原則に従い、自然本性の光とキリスト教的思慮によって律する必要があることをわれわれは認める」と記されています。少し分かりにくい文章ですが、ここで語られていることは大切です。たとえば、聖書には、礼拝を午前十時から始めなさい、とは書かれていません。礼拝堂に椅子を置くべきか、畳に座るべきかも書かれていません。教会役員会を火曜日に開くべきか、水曜日に開くべきかも書かれていません。このようなことまで、聖書は細かく命じてはいません。そこで信仰告白は、「**自然本性の光**」と「**キリスト教的思慮**」という言葉を用いています。「自然本性の光」とは、人間に与えられた理性や判断力です。もちろん、それは罪の影響を受けています。しかし、神はなお被造世界の秩序の中で、人間に判断する力を与えておられます。また、「キリスト教的思慮」とは、聖書に養われた信仰者としての成熟した判断を意味しています。つまり、聖書に明確な命令がない事柄については、教会は知恵をもって判断する自由が与えられているのです。

六 十分性と自由

ここで、第六節全体を振り返ってみましょう。この節は、一見すると二つの異なることを語っているように見えます。一方では、**救いに必要なことは、すべて聖書に十分に示されてい**

る、と語っています。しかし他方では、**教会は状況に応じて判断すべきこともある**、とも語っています。これは矛盾ではありません。むしろ、ウェストミンスター信仰告白は、この二つを見事に調和させています。神が救いのために必要とされたことについて、教会は何一つ付け加えることができません。また、何一つ取り除くこともできません。しかし、教会生活には、時代や文化によって異なる事柄があります。そのような事柄については、聖書の原則に従いながら、教会が責任をもって判断していくことが求められます。ここに、改革派教会の自由があります。それは、勝手な自由ではありません。聖書の権威の下で与えられた自由です。だからこそ、この自由は教会の一致を壊すためではなく、福音をそれぞれの時代と社会の中で忠実に証しするために用いられるのです。

まとめ

第一章第六節は、「聖書の十分性」を告白しています。しかし、それは「聖書にはあらゆる分野の知識が書かれている」という意味ではありません。聖書は、神の栄光、人間の救い、信仰と生活に必要な神の御心を十分に示しています。そして、その聖書を理解するためには、聖霊の照らしが必要です。さらに、聖書が具体的に命じていない事柄については、教会は聖書の一般原則に従いながら、良識と知恵をもって判断する責任を負っています。これが、ウェストミンスター信仰告白第一章第六節の豊かな教えです。

第七節 聖書は救いに必要なことを明らかに語る

第六節では、神の栄光、人間の救い、信仰と生活に必要なことは、すべて聖書に十分に示されていることを学びました。しかし、ここで新たな疑問が生まれます。もし聖書が十分なのであれば、なぜ教会にはさまざまな解釈が存在するのでしょうか。また、聖書には難しい箇所も少なくありません。旧約聖書には理解しにくい預言や象徴があります。新約聖書でも、パウロの手紙は難解だと感じる人が少なくありません。実際、新約聖書自身も、パウロの手紙の中には「理解しにくいところ」があると述べています（Ⅱペトロ 3 章 15～16 節）。では、ウェストミンスター信仰告白は、この問題をどのように考えているのでしょうか。

一 第七節は何を告白しているのか

第七節は次のように始まります。

「聖書の中にあるすべての事柄がそれ自体で同じように明白であるとか、すべての人に同じように明瞭であるというわけではない。」

この最初の一文は、とても大切です。信仰告白はまず、**聖書には難しい箇所がある**という事実を率直に認めています。これは宗教改革者たちの現実的な姿勢を示しています。彼らは、「聖書は簡単な本だから、誰でも同じように理解できる」とは考えませんでした。歴史的背景を知らなければ理解しにくい箇所もあります。原語を学ぶことによって理解が深まる箇所もあります。長年研究が続けられている難解な問題もあります。そのことを、ウェストミンスター信仰告白は最初から認めているのです。

二 それでも聖書は明瞭である

しかし、第七節はそこで終わりません。続いて、「それにもかかわらず、救いのために知られ、信じられ、守られる必要がある事柄は、聖書のどこかの箇所で非常に明瞭に提示され、

明らかにされている」と告白しています。ここが、この節の中心です。信仰告白が言う「明瞭性」とは、**聖書全体が容易である**という意味ではありません。そうではなく、**救いに必要なことは十分に明らかである**という意味です。これは第六節とのつながりを考えると、よく理解できます。第六節は「聖書の十分性」を語りました。第七節は、その十分な救いの福音が、教会だけではなく、神の民に理解できるように語られていることを告白しているのです。つまり、第六節と第七節は一つの内容を別の角度から語っています。

三 宗教改革が守ろうとしたこと

宗教改革以前の西方教会では、聖書は主としてラテン語で読まれていました。もちろん、これは歴史的事情によるものであり、当時の教会が聖書を隠そうとしていたと単純に考えるべきではありません。しかし、結果として、多くの信徒は礼拝で聖書を聞いても、その内容を十分に理解することができませんでした。宗教改革者たちは、この状況を深く憂えました。だからこそ、聖書はドイツ語や英語、フランス語など、それぞれの国の言葉へ翻訳されるべきだと考えたのです。その背景には、第七節の信仰がありました。神は、ご自分の民に理解できない言葉で語られるお方ではありません。神は、人が救いに至るために必要なことを、理解できるように語ってくださるお方です。その確信が、宗教改革における聖書翻訳の大きな原動力となりました。

四 聖書はなぜ様々に解釈されるのか

ここで一つの疑問が生まれます。もし聖書が救いに必要なことを明らかに語っているのであれば、なぜ教会には多くの教派があり、聖書の解釈もさまざまなのでしょうか。この問いに対して、ウェストミンスター信仰告白は「聖書が不明瞭だから」とは考えません。むしろ、人間の側にさまざまな要因があることを認めています。私たちは、それぞれ異なる時代や文化の中で聖書を読みます。知識にも経験にも違いがあります。また、私たちは皆、罪の影響の中に生きていますから、自分に都合のよいように聖書を読んでしまう誘惑もあります。そのため、聖書を読むときには謙遜さが求められます。自分一人の理解だけを絶対視するのではなく、教会の歴史の中で積み重ねられてきた解釈にも耳を傾け、兄弟姉妹とともに学び続ける姿勢が大切です。改革派教会が信仰告白や信条を重んじるのも、そのためです。信仰告白は聖書に代わるものではありません。しかし、長い教会の歩みの中で、聖書がどのように理解されてきたかを示す大切な道しるべとなっています。

五 「聖書は聖書によって解釈される」

宗教改革以来、改革派教会には一つの重要な解釈原則があります。それは、「**聖書は聖書によって解釈される**」という原則です。難しい箇所があるならば、より明らかな箇所によって理解する。一つの節だけを取り出して結論を出すのではなく、聖書全体の証言に耳を傾ける。この姿勢は、ウェストミンスター信仰告白全体にも貫かれています。例えば、福音書だけを読んでいては十分に理解できないことも、使徒言行録やパウロの手紙、さらには旧約聖書まで視野に入れることで、より深く理解できることがあります。また、新約聖書を読むときにも、旧約聖書の背景を知ることによって、イエスの言葉や使徒たちの教えがいつそう豊かに理解できるようになります。これまで研修所の旧約聖書概説や正典学で繰り返し語って来たことですが、聖書は六十六巻の寄せ集めではなく、一つの救いの歴史を証言する書物です。その全体性を尊重して読むことが、改革派教会の聖書理解の特徴と言えるでしょう。

六 聖書学は「明瞭性」と矛盾するのか

現代では、聖書学が大きく発展しました。古代語の研究、写本研究、考古学、文学的分析など、多くの学問が聖書理解を助けています。では、そのような研究が必要であるということは、「聖書は明瞭である」という第七節と矛盾するのでしょうか。そうではありません。聖書学は、聖書をより正確に理解するための大切な助けです。歴史的背景を知ることによって、預言者の言葉の重みが見えてきます。ユダヤ教の伝統を学ぶことによって、新約聖書の議論がより深く理解できます。原語を学ぶことによって、日本語訳だけでは伝わりにくいニュアンスが分かることもあります。しかし、これらの学問は、**救いの福音そのものを新しく発見するために存在するものではありません**。福音は、すでに聖書の中で十分に語られています。聖書学は、その福音をより豊かに、より正確に理解するための奉仕をする学問です。この点で、ウェストミンスター信仰告白の「明瞭性」と現代の聖書学は対立するものではなく、むしろ互いに補い合う関係にあると言えるでしょう。

まとめ

第一章第七節は、「聖書は誰が読んでもすぐに理解できる本である」と教えているのではありません。聖書には難しい箇所もあります。そのため、教会の教師の働きも、神学も、聖書学も必要です。しかし同時に、神はご自分の民を救いへ導くために必要なことを、聖書の中で十分に、そして明らかに語ってくださっています。だからこそ、教会は安心して聖書を開き、礼拝で朗読し、説教し、信徒一人ひとりが学び続けることができるのです。第七節が語る「明瞭性」とは、聖書のすべてが容易であるという意味ではなく、**救いの福音は神の民に届くように明らかに示されている**という神の恵みへの信頼の告白なのです。

第八節 神の言葉はすべての民の言葉で読まれるために

これまで私たちは、第一章を通して、聖書が神の言葉であること、その權威は神ご自身に由来すること、そして救いに必要なことが十分に、しかも明らかに示されていることを学んできました。すると、自然に次のような問いが生まれます。「**私たちは、どの聖書を読めばよいのでしょうか。**」教会にはさまざまな翻訳聖書があります。日本語だけでも、新共同訳、新改訳、聖書協会共同訳などがあります。さらに、その背後にはヘブライ語やギリシア語で書かれた原典があります。ウェストミンスター信仰告白第一章第八節は、この問題を取り上げています。

一 第八節は何を告白しているのか

第八節の前半では、旧約聖書はヘブライ語で、新約聖書はギリシア語で記されたことを確認したうえで、それらは神の特別な配慮によって保たれてきたのであり、教会において最終的な基準であると告白しています。宗教改革者たちがここで重視したのは、「**原典に立ち返る**」という姿勢でした。それは単なる学問的関心ではありません。神が預言者と使徒を通して与えられたみ言葉に、できる限り忠実に耳を傾けようという信仰の姿勢でした。当時の改革者たちは、“Ad fontes”（源泉へ）という合言葉を掲げました。これは、聖書だけではなく、古代教会の文献についても、「できるだけ原資料に近づこう」という人文主義の精神を受け継いでいます。しかし改革派教会にとって、その究極の「源泉」とは、神が靈感によって与えられた聖書そのものだったのです。

二 「原典」とは何を意味するのか

ここで、「原典」という言葉について少し説明しておきたいと思います。私たちはしばしば、「原典」という言葉を耳にします。しかし、現代の聖書学では、預言者や使徒が最初に書いた自筆本（オートグラフ）は残されていないことが知られています。今日私たちが持っているのは、多くの写本を比較しながら復元されたヘブライ語本文とギリシア語本文です。これは、ウェストミンスター信仰告白の時代には十分には知られていなかった事実です。だからといって、信仰告白の価値が失われるわけではありません。信仰告白が語ろうとしていることは、**神が教会に託された聖書本文を、歴史の中で守り導いてこられた**という信仰です。現代の本文批評学もまた、その歴史の歩みを丁寧にたどりながら、より確かな本文を求め続けています。したがって、本文批評は信仰の敵ではありません。むしろ、神が歴史を通して聖書を伝えてくださった歩みを謙虚に研究する学問と言うことができます。

三 翻訳は神の言葉なのか

第八節は後半で、とても大切なことを語ります。それは、**聖書はすべての国民の言葉に翻訳されるべきである**という告白です。宗教改革以前、礼拝ではラテン語聖書が広く用いられていました。しかし宗教改革者たちは、人々が自分の言葉で神のみ言葉を聞くことが必要だと考えました。神は、ご自分の民に理解できない言葉で語られるお方ではありません。だからこそ、聖書は各国の言語に翻訳され、礼拝で読まれ、家庭でも読まれるべきだと考えたのです。この考えは、日本の教会にとっても大きな意味を持っています。私たちが毎週礼拝で日本語の聖書を読み、日本語で説教を聞くことができるのは、多くの翻訳者たちの長年にわたる働きの実りです。翻訳は単なる言葉の置き換えではありません。神のみ言葉を、それぞれの文化と言語の中に忠実に届ける教会の大切な奉仕なのです。

四 翻訳は「解釈」でもあります

聖書を翻訳するということは、単に外国語を日本語に置き換える作業ではありません。翻訳とは、原文の意味を十分に理解した上で、その意味を別の言語で最も適切に表現する営みです。そのため、一つのヘブライ語やギリシア語の単語に、日本語ではいくつかの訳し方が考えられることがあります。また、文章の構造や慣用表現も、日本語ではそのまま再現できない場合があります。したがって、どの翻訳にも、ある程度の「解釈」が伴います。これは欠点ではありません。言語が異なる以上、避けることのできないことです。だからこそ、教会は翻訳を慎重に行い、多くの研究者や牧師たちが長い時間をかけて聖書を翻訳してきました。私たちが礼拝で用いている**新共同訳**も、そのような長年の共同作業によって生まれた翻訳です。もちろん、どの翻訳も完全ではありません。新共同訳にも特徴があり、他の翻訳にもそれぞれの長所があります。しかし、大切なのは、「どの翻訳が絶対に正しいか」という議論ではなく、それぞれの翻訳を通して神のみ言葉に耳を傾けることです。翻訳の違いを知ることとは、聖書をより深く理解する助けになりますが、それによって福音そのものが変わるわけではありません。

五 教会はなぜ翻訳聖書を用いるのか

第八節は、聖書がすべての民の言葉に翻訳されるべき理由として、「神の言葉が豊かに宿るため」と述べています。ここには、宗教改革者たちの教会理解がよく表れています。礼拝は、聖職者だけが神のみ言葉を知る場ではありません。教会に集うすべての人が、神の

み言葉を聞き、理解し、それに応答する場です。そのためには、人々が理解できる言葉で聖書が読まれなければなりません。この考え方は、使徒パウロが礼拝における異言について、「教会を造り上げるためには、理解できる言葉で語られることが大切である」と教えていることとも響き合っています（I コリント 14 章）。改革派教会が母国語による礼拝を重んじてきた背景には、このような聖書理解があります。神は、ご自分の民に理解できない言葉で神秘を押しつけるお方ではなく、人々が理解し、信じ、従うことができるように語ってくださるお方なのです。

六 原典を尊重し、翻訳を大切にする

ここまで見てきたように、第八節は二つのことを同時に教えています。第一に、教会は原典を尊重しなければなりません。聖書研究においてヘブライ語やギリシア語を学ぶことは、神が最初に与えてくださったみ言葉に、より忠実に耳を傾けるためです。第二に、教会は翻訳聖書を大切にしなければなりません。なぜなら、神のみ言葉は、すべての民に届けられるために与えられたものだからです。この二つは対立するものではありません。原典を軽んじれば、翻訳は根拠を失います。しかし、翻訳を軽んじれば、神のみ言葉は一部の専門家だけのものになってしまいます。ウェストミンスター信仰告白は、この両方を大切にしています。これは改革派神学の健全なバランスと言えるでしょう。

まとめ

第一章第八節は、神のみ言葉が歴史の中で教会に託され、守られ、そして世界中の人々に届けられてきたことを感謝をもって告白しています。神のみ言葉は、ヘブライ語やギリシア語という特定の言語だけに閉じ込められているわけではありません。それは、あらゆる民族、あらゆる言語で読まれ、聞かれ、宣べ伝えられるために与えられました。私たちが今日、日本語で聖書を開き、日本語で礼拝をささげることができるのも、その長い歴史の実りです。その意味で、翻訳聖書を読むことは、原典から離れることではなく、神がすべての民に福音を届けようとしておられる御心にあずかることなのです。

第九節 聖書は聖書によって解釈される

これまで第一章では、聖書が神の言葉であること、その権威は神ご自身に由来すること、そして救いに必要なことが十分に、しかも明らかに示されていることを学んできました。また前回は、神のみ言葉がヘブライ語とギリシア語で記され、それぞれの国の言葉へ翻訳されることの大切さについて学びました。しかし、聖書が手元にあり、自分の言葉で読むことができるようになったとしても、なお一つの問題が残ります。「**私たちは聖書をどのように読めばよいのでしょうか**」。聖書には、分かりやすい箇所もあれば、難しい箇所もあります。預言書や黙示文学には象徴的な表現が多く、ある箇所だけを読んで結論を出すことは危険な場合があります。そこでウェストミンスター信仰告白は、第九節で一つの基本原則を示します。

一 第九節は何を告白しているのか

第九節は次のように告白しています。

「聖書解釈の誤ることのない基準は聖書自身である。それゆえに、聖書のどの箇所でも、その真の十全な意味（それは多様ではなく一つである）について疑問があるときは、より明瞭に語っている他の箇所によって調べて知るようにしなければならない。」

この節は短い文章ですが、宗教改革以来の聖書解釈学の基本原理を簡潔に表しています。まず注目したいのは、「**聖書解釈の誤ることのない基準は聖書自身である**」という言葉です。ここで信仰告白は、人間の解釈が誤ることを前提としています。どれほど優れた神学者であっても、その解釈は絶対ではありません。教会の伝統も尊重されます。信仰告白も大切です。しかし、それらはすべて聖書の下に置かれます。最終的な基準は、聖書そのもののなのです。

二 「聖書は聖書によって解釈される」とは

この原則は、しばしば「**難しい箇所は、分かりやすい箇所で説明する**」という意味で説明されます。もちろん、それは間違いではありません。例えば、新約聖書が旧約聖書を引用するとき、多くの場合、旧約の意味がより深く照らし出されます。また、一つの福音書だけでは分かりにくいことも、他の福音書を読むことによって理解が深まります。しかし、この原則は、それだけではありません。ここで重要なのは、**聖書は一つの書物として読まれるべきである**ということです。旧約聖書と新約聖書は別々の宗教を語っているのではありません。六十六巻の聖書全体が、一つの神の救いの歴史を証言しています。ですから、一つの節だけを切り離して読むのではなく、聖書全体の流れの中で理解することが求められます。

三 正典全体を読むということ

ここで、これまで学んできた「正典」という視点が重要になります。第一章第二節では、教会が受け継いできた六十六巻の正典について学びました。それは単に「六十六冊の本が集まっている」という意味ではありません。正典とは、神が教会に与えられた一つの証言です。そのため、一つの書物だけを独立して読むのではなく、正典全体との関係の中で読む必要があります。例えば、創世記のアブラハム契約は、出エジプト記へとつながり、預言者たちによって新しい契約への希望として語られ、新約聖書においてキリストにおいて成就した神の約束として理解されます。このように、一つ一つの書物は、正典全体の中でその意味を豊かにしていきます。先学期の研修所の講義では「旧約正典学」を学びましたが、そこで強調されたのは、正典とは完成された目録ではなく、**教会が受け継いできた信仰の証言全体**である、ということです。したがって、第九節の「聖書は聖書によって解釈される」という原則は、単なる解釈技法ではなく、正典全体を尊重する読み方を教えていると言えるでしょう。

四 教会の伝統は不要なのでしょうか

ここで誤解してはならないことがあります。「聖書の無謬な解釈者は聖書自身である」と聞くと、「それなら教会の歴史も信条も必要ない」と考える人がいます。しかし、それはウェストミンスター信仰告白の考えではありません。第四節でも学んだように、教会は聖書の權威を創り出すことはできませんが、聖書を証しする大切な務めを与えられています。同じように、教会の信条や信仰告白も、聖書に代わるものではありませんが、長い歴史の中で教会が聖書をどのように理解してきたかを示す貴重な証言です。私たちは二千年にわたる教会の歩みの中に立っています。ですから、自分一人で初めて聖書を読むかのように考えるのではなく、歴代の教会に学びながら聖書を読むことが求められます。改革派教会がウェストミンスター信仰告白を重んじるのも、そのためです。信仰告白は、私たちに代わって聖書を読むものではありません。しかし、聖書を読む際の信頼できる案内人となってくれます。

五 現代の聖書学との関係

この原則は、現代の聖書学とも対立するものではありません。歴史学は、聖書が語られた時代を明らかにします。考古学は、当時の社会や文化を教えてください。言語学は、ヘブライ語やギリシア語の細かな意味を明らかにします。こうした研究は、私たちが聖書をより正確に理解するために大きく役立っています。しかし、それらはあくまでも**聖書を理解するための助け**です。聖書そのものに代わる権威ではありません。改革派神学は、学問を軽視することなく、同時に学問を絶対視もしません。最終的に私たちを導くのは、聖書全体の証言です。この姿勢は、今日の教会においても大切に受け継がれるべきでしょう。

六 正典として聖書を読む

近年の聖書学では「正典的聖書解釈」と呼ばれる研究が發展しています。この立場は、聖書を単なる歴史資料の集まりとしてではなく、教会が受け継いできた**正典**として読むことを重視します。その意味では、ウェストミンスター信仰告白第九節の精神と深く響き合うものがあります。もちろん、信仰告白が直接その方法論を語っているわけではありません。しかし、「聖書は聖書によって解釈される」という原則は、個々の書物を切り離して読むのではなく、正典全体の中で理解するという姿勢を私たちに教えています。例えば、預言書を読むときにはモーセ五書とのつながりを考えます。福音書を読むときには旧約聖書の約束を思い起こします。パウロの手紙を読むときには、福音書や旧約聖書との連続性を意識します。このように聖書全体が互いに照らし合うところに、正典としての聖書の豊かさがあります。ですから、私たちは一つの節だけを取り出して教理を築くのではなく、聖書全体の響きの中で神の御心を聞き取ろうと努めるのです。

まとめ

第一章第九節は、「聖書の無謬な解釈者は聖書自身である」と告白しています。それは、教会や神学を否定することではありません。むしろ、教会も神学も、そして聖書学も、すべて聖書に仕えるものであることを確認しています。また、この原則は、難しい箇所を分かりやすい箇所の説明するという技法にとどまりません。それは、旧約聖書と新約聖書を含む**正典全体を一つの神の証言として読む**という、教会の基本的な姿勢を示しています。私たちは、自分の考えを聖書に押しつけるのではなく、聖書全体に耳を傾けることによって、神が教会に語っておられる声を聞き続けたいと思います。

第十節 教会を最終的に導かれるのは誰か

最後に、一つの大切な問いが残ります。「**教会の中で意見が分かれたとき、最後に判断するのは誰なのか**」。神学者でしょうか。教会会議でしょうか。あるいは牧師でしょうか。ウェストミンスター信仰告白は、この問いに明確に答えています。

一 第十節は何を告白しているのか

第十節はこのように告白しています。

「すべての宗教上の論争を裁定し、また、すべての教会会議の決定、すべての古代著作家の見解、すべての人間の教説、すべての私的霊などを吟味することができる、そしてその判決にわたしたちが満足しなければならない最高の審判者は、まさしく、聖書において語っておられる聖霊以外の何ものでもありえない。」

この節には、宗教改革の精神がよく表れています。ここで注目したいのは、「教会会議」や「古代の著者」が否定されているわけではないということです。ウェストミンスター会議の神学者たちは、自分たち自身が教会会議を開いてこの信仰告白を作成しています。また、教父たちや中世の神学者たちの著作も数多く引用しています。ですから、「教会会議は無意味だ」「教父を読む必要はない」と言っているわけではありません。問題は、「**最終的な権威は何か**」ということです。

二 「聖書の中で語っておられる聖霊」

第十節には、とても印象的な表現があります。「**聖書において語っておられる聖霊**」。ここで信仰告白は、「聖書」と「聖霊」を切り離していません。第一章第五節では、「聖霊の内なる証し」を学びました。そこでは、聖霊はみ言葉を通して私たちに確信を与えられることを見ました。第十節でも同じです。聖霊は、聖書から離れて新しい教えを与えるのではありません。また、個人の霊的体験が聖書を超える権威を持つものでもありません。聖霊は、ご自身が靈感を与えられた聖書を通して教会に語られます。ですから、教会が論争に直面したときに求めるべきことは、「誰の意見が強いのか」ではなく、「**聖書は何を語っているか**」を共に聞き取ることなのです。

三 「個人の霊」を警戒する理由

第十節は「個人の霊（私的霊）」という言葉にも触れています。これは、宗教改革時代の歴史を背景にしています。当時、一部の急進的な改革運動では、「聖霊から直接示された」という個人的な啓示が、聖書よりも優先されることがありました。ウェストミンスター信仰告白は、そのような傾向に慎重でした。なぜなら、人間は自分の願いや感情を、「神の声」と思い込んでしまう危険があるからです。これは現代の教会でも同じです。「神が私にこう語られた」「私は聖霊から直接示しを受けた」そのような言葉が語られることがあります。もちろん、神は摂理の中で私たちを導かれます。しかし、その導きは、決して聖書に反するものではありません。改革派教会は、どのような霊的経験であっても、**聖書によって吟味されなければならない**と考えます。これは、聖霊を制限することではありません。むしろ、真の聖霊の働きを大切にするためです。

四 教会は聖書の下に立つ共同体

第一章を学んできて、繰り返し確認してきたことがあります。それは、**教会は聖書の上に立つのではなく、聖書の下に立つ**ということです。教会は聖書を作ったものではありません。教会は聖書に権威を与えたものでもありません。教会は、神から託された聖書を受け取り、それを宣べ伝える務めを委ねられています。だからこそ、教会は常に聖書によって改革され続けなければなりません。宗教改革者たちが掲げた有名な言葉に、「**改革された教会は、神の言葉によって絶えず改革され続ける教会である** (*Ecclesia reformata, semper reformanda secundum Verbum Dei*) 」というものがあります。この言葉は、ウェストミンスター信仰告白第一章の精神をよく表しています。教会が自分自身を絶対化するのではなく、いつも神のみ言葉の前に立ち返ること。それこそが改革派教会の歩みです。

第一章のまとめ

第一章は、「聖書論」と呼ばれる章です。しかし、それは単に「聖書について説明する章」ではありません。第一章全体を通して告白されているのは、**神は今も聖書を通して教会に語っておられる**という信仰です。神は、ご自分を知らせるために聖書を与えてくださいました。聖霊は、その聖書を通して私たちの心を照らしてくださいます。教会は、その聖書を忠実に読み、宣べ伝え、聞き従う共同体として召されています。ですから、ウェストミンスター信仰告白第一章は、「聖書を大切にしましょう」という勧めで終わるのではありません。「**神が語っておられるみ言葉に、教会は聞き従う**」という信仰の告白で締めくくられているのです。